

## 日本版 School Liking and Avoidance Questionnaire (SLAQ) 親評定版の信頼性と妥当性の検討<sup>1)</sup>

本間 優子  
新潟青陵大学

### 問題と目的

学校は児童・生徒において家庭以外の場で最も過ごす時間が長い場である。学校に否定的な感情を抱くことは、自尊感情の低下、抑うつといった心理的な問題、不登校や反社会的な行動の発生といった、行動面の問題にも影響を及ぼすことが明らかとなっている (Bulotsky-Shearer, Fantuzzo, & McDermott, 2008)。

児童自身が学校に対して感じる感情を測定する尺度として Ladd & Price (1987) による学校肯定感・回避感尺度がある (School Liking and Avoidance Questionnaire: SLAQ)。SLAQ は教師評定版、親評定版も開発されている (Ladd, Buhs, & Seid, 2000)。各尺度は学校肯定感、学校回避感の2因子構造であり、児童の他、幼児のプレスクールへの適応 (Ladd, Kochenderfer, & Coleman, 1996; Ladd & Coleman, 1997)、幼児期から児童期にかけての学校移行期における学校適応に関する研究でも用いられている (Ladd, 2006; Ladd & Burgess, 2001)。SLAQ は日本では児童評定版 (大対・堀田・竹島・松見, 2014)、教師評定版 (本間・内山, 2016) の信頼性・妥当性の検討が行われているが、親評定版は未検討である。

親評定版開発の意義として、幼保から小学校への移行期間の子どもの適応状態に関する縦断的な検討が可能となる点を挙げることができる。小学校低学年の子どもが学校適応を自己評定することは難しく、他者評定が望ましい。しかしながら幼保から縦断的に対象児の進学先の小学校教諭に評定を依頼することは、幼保小が系列校でない限りは実施困難である。文部科学省 (2008) は教育の連続性・一貫性を目的とし、幼小接続の重要性を提言している。日本版 SLAQ 親評定版の信頼性・妥当性を検討し活用することは、学校移行期の子どもの適応状態の他者評定を可能とする。親評定版 SLAQ を活用し幼児期での適応状態を明らかにし、小学校入学後に不適応を起こす可能性のある子どもをあらかじめ予測することは、保護者、幼保、小学校の連携に役立ち、小1プロブレム予防の一助となる。また、入学後に

再度評定を行い適応状態を把握することで、不適応を起こした場合の早期介入に役立てることができる。このように子どもの適応状態を縦断的に評価することは、学校移行期に向けて連続性・一貫性のある教育的支援の実施につながると言える。本研究は日本版 SLAQ 親評定版の信頼性・妥当性を検討することを目的とした。

日本版 SLAQ 親評定版の構成概念妥当性の検討として、以下の2点を行うこととした。1点目として、構成概念妥当性の検討には類似した概念の保護者による親評定が必要だが、本邦では未開発のため児童用である改訂版学校享受感尺度 (古市, 2004)、学校ざらい感情測定尺度 (古市, 1991) の文言の末尾を著者に許可を得て他者評定できるように微修正し使用することとした。2点目として、Ladd et al. (2000) では、親子に児童評定版 SLAQ および親評定版 SLAQ への回答を求め、学校肯定感尺度と学校回避感尺度間の相関係数をそれぞれ算出している。子評定が  $r = -.45$ 、親評定が  $r = -.30$  であり、自己評定、他者評定それぞれが学校肯定感尺度と学校回避感尺度間に負の相関関係を示すことが明らかとなった。自己評定・他者評定とも尺度間に相関関係が示されていることから、日本版 SLAQ 親評定版に一定の妥当性が担保されるならば、同じ学校肯定感および学校回避感という2因子構造で構成される親評定と日本版 SLAQ 児童評定版を用いた子評定間にも、相関関係が示されることが予想される。そこで本研究では子に対し、日本版 SLAQ 児童評定版 (大對他, 2014) への回答を求めることとした。

### 方法

**対象者** (株)マクロミルの登録者のうち、同居している小学4年生以上の子どもがおり、子どもが一人でwebアンケートに回答可能と保護者より回答がなされた親子を対象とした。兄弟姉妹がいる場合は保護者は年長者を評定し、子どもの自己評定も年長者が回答するよう求め、309組の親子のデータが収集された。保護者の内訳は父親128名、母親181名 ( $M = 41.60, SD = 4.82$ )、子どもの学年の内訳は4年生91名、5年生107名、6年生111名であった。

**調査項目** 日本版 SLAQ 親評定版は原著者に許可を得たのち、バックトランスレーションが行われ、原版と日本語の項目が同義であることを確認した上で使用した。質問項目は学校肯定感尺度 (5項目)、学校回避感尺度 (5項目)

1) 本研究は日本学術振興会科学研究費 (課題番号: 19K03093) の助成を受け実施された。本研究は日本学校心理学会第21回大会にてポスター発表を行ったものを再分析し、加筆・修正したものである。

の全10項目であった。さらに、児童用である改訂版学校享受感尺度(古市, 2004), 学校ざらい感情測定尺度(古市, 1991)の文言の末尾を著者に許可を得て親が子どもを評定できるように微修正し, 使用した(例: 原版「学校さえなければ, 毎日楽しいだろうなと思う」を「学校さえなければ, 毎日楽しいだろうなと思っているようだ」)。子ども自身の自己評定については, 日本版SLAQ児童評定版(大対他, 2014)を用いた。回答方法はすべての尺度において5件法であった。

**回答手順** 調査はweb上で行われた。カウンターバランスを取るため回答順序を①親の後に子②子の後に親が回答するモニターに調査会社が割り振った上で実施した。webページにはデリケートな内容に関する質問のため, 回答したくないと判断した場合は回答しなくてもよいこと(「回答しない」ボタンを押す), 回答途中でも「回答をやめる」ボタンを押せば終了可能であることを明記した。その上で①誰にも相談せず自分が思った通りに回答すること②親, もしくは子が各々の質問に最後まで回答すると前のページには戻るができない設計であり, お互いの回答内容をwebページ上では確認できないことに加え, 回答内容を質問, 確認せずに独立して回答することを説明文として記載した。

**調査時期** 2019年7月1日, 2日に実施された。

**倫理的配慮** 本研究は第一著者が所属する大学の倫理審

査委員会の承認を得た上で実施された(承認番号201801)。

## 結果と考察

日本版SLAQ親評定版の因子モデルを検討するため, 原尺度と同様に2因子を仮定して最尤法・プロマックス回転による探索的因子分析を行った(Table 1)。学校肯定感の尺度項目である項目5「学校について, ネガティブな話をする」(反転項目), 学校回避感の尺度項目である項目10「学校に行くことについて不満を言う」は因子負荷量が低いことが示され(.05, .29), さらに項目10については原版とは異なり負の方向で(-.37)学校肯定感尺度に収束された。その他は原版どおりに第1因子は学校肯定感に関する項目, 第2因子には学校回避感に関する項目が高い因子負荷量(.91-.53)を示した。40を基準とし, 項目5, 10は, 以降の分析からは削除することとした。

次に, 確認的因子分析を行った。 $GFI=.94$ ,  $CFI=.95$ ,  $RMSEA.09$ であった。 $RMSEA$ が若干高めだったものの, 10以下であり, それぞれの値は良好な値であった。学校肯定感尺度と学校回避感尺度間の相関係数は $r=-.40$ と負の相関関係を示した。以上の結果から, 日本版SLAQ親評定版は原版同様に学校肯定感尺度, 学校回避感尺度で構成される2因子構造であると判断した。

信頼性について検証するため,  $\alpha$ 係数を算出した。学校肯定感が.91, 学校回避感が.92であり, 高い内的整合性が確

**Table 1** 日本版SLAQ親評定版の因子分析結果と平均値(SD)

	F1	F2	M	SD
<b>F1. 学校肯定感尺度</b>				
3. 学校に行くことを楽しみにしているように見える (Looks forward to going to school)	.81	.08	3.68	1.08
1. 学校の活動や行事を楽しんでいる (Enjoys school activities or events)	.70	.04	4.11	.92
7. 学校であったいいことを話してくれる (Tells me about good things that have happened at school)	.62	-.03	3.96	.88
9. おかしい, おもしろいと思った学校のできごとを話してくれる (Tells me about school events that s/he thinks are funny or humorous)	.53	-.01	3.99	1.02
5. 学校について, ネガティブな話をする(R) (Talks about school in a negative way)	.05	.05	3.30	1.27
<b>F2. 学校回避感尺度</b>				
2. 学校を休んで家にいる理由を作る (Makes up reasons to stay home from school)	.06	.91	1.34	.89
8. 学校を休んで家にいさせてくれるように頼む (Asks to stay home from school)	.03	.86	1.32	.92
6. 朝, 学校に行く時間になるとうろたえる (Becomes upset when it's time to go to school in the morning)	.02	.79	1.39	.96
4. 学校に行くことに恐怖感を抱いているようだ (Seems to dread going to school)	-.09	.68	1.37	.92
10. 学校に行くことについて不満を言う (Complains about going to school)	-.37	.29	1.83	1.23

注. Rは反転項目

認された。

妥当性検証のため、日本版SLAQ親評定版と改訂版学校享受感尺度(古市, 2004), 学校ざらい感情測定尺度(古市, 1991)間の相関係数を算出した。学校肯定感尺度は学校享受感尺度と正の相関( $r=.71, p<.01$ ), 学校ざらい感情測定尺度と負の相関( $r=-.63, p<.01$ ), 学校回避感尺度は学校享受感尺度と負の相関( $r=-.39, p<.01$ ), 学校ざらい感情測定尺度と正の相関( $r=.69, p<.01$ )を示した。次に親評定-子評定の学校肯定感尺度, 親評定-子評定の学校回避感尺度の相関係数を算出した。学校肯定感間に正の相関( $r=.65, p<.01$ ), 学校回避感間に正の相関( $r=.51, p<.01$ )を示した。これらの結果から構成概念妥当性は担保されたと言える。以上の結果から、日本版SLAQ親評定版は一定の信頼性・妥当性を有していると考えられる。

今後の展望として、本尺度の活用による幼児期から児童期の学校移行期の子どもの適応状態の評価とその支援のほか、小学校中学年以上を対象とした同一尺度を用いた立場の異なる者による評定を上げることができる。本間(2020)は教師評定と子評定の日本版SLAQ得点をクラスター化し(教師高・児童高群, 教師高・児童低群, 教師低・児童高群, 教師低・児童低群), 学校適応について教師認知と児童認知の相違を検討し, 各クラスターにおける子ども自身が感じる友人関係, 教師関係, 学習関係等, 領域別の学校適応感の特徴を明らかにし, 介入が必要な領域を示している。本研究においても今後分析を進め, 親評定-子評定のSLAQ得点の相違, 特に親評定と子評定が一致しないケースの検討, および各クラスターごとの子ども自身が感じる領域別の学校適応感の特徴を明らかにし, 教育現場に有益な知見を提供することが望まれる。

#### 引用文献

Bulotsky-Shearer, R. J., Fratuzzo, J. W., & McDermott, P. A. (2008). An investigation of classroom situational dimensions of emotional and behavioral adjustment and cognitive and social outcomes for Head Start children. *Developmental Psychology, 44*, 139-154.

古市裕一(1991). 小・中学生の学校ざらい感情とその規定

要因 カウンセリング研究, 24, 123-127.

- 古市裕一(2004). 小・中学生の学校生活享受感情とその規定要因 岡山大学教育学部研究集録, 126, 29-34.
- 本間優子(2020). 児童期における役割取得能力と学校適応の関係 ミネルヴァ書房
- 本間優子・内山伊知郎(2016). 教師評定版SLAQ (School Liking and Avoidance Questionnaire) 日本版の作成 道徳性発達研究, 10, 69-73.
- Ladd, G. W. (2006). Peer rejection, aggressive or withdrawn behavior, and psychological maladjustment from ages 5 to 12: An examination of four predictive models. *Child Development, 77*, 822-846.
- Ladd, G. W., Buhs, E. S., & Seid, M. (2000). Children's initial sentiments about kindergarten: Is school liking an antecedent of early classroom participation and achievement? *Merrill-Palmer Quarterly, 46*, 255-279.
- Ladd, G. W., & Burgess, K. B. (2001). Do relational risks and protective factors moderate the linkages between childhood aggression and early psychological and school adjustment? *Child Development, 72*, 1579-1601.
- Ladd, G. W., & Coleman, C. C. (1997). Children's classroom peer relationships and early school attitudes: Concurrent and longitudinal associations. *Early Education and Development, 8*, 51-66.
- Ladd, G. W., Kochenderfer B. J., & Coleman, C. C. (1996). Friendship quality as a predictor of young children's early school adjustment. *Child Development, 67*, 1103-1118.
- Ladd, G. W., & Price, J. M. (1987). Predicting children's social and school adjustment following the transition from preschool to kindergarten. *Child Development, 58*, 1168-1189.
- 文部科学省(2008). 幼稚園教育要領 フレーベル館
- 大対香奈子・堀田美佐緒・竹島克典・松見淳子(2014). 日本版SLAQの作成: 学校適応の規定要因および抑うつとの関連の検討 日本学校心理士会年報, 6, 59-69.
- 2020.11.19 受稿, 2021.6.11 採択—

## Development of the Japanese Version of the Parent Report of the School Liking and Avoidance Questionnaire (SLAQ)

Yuko HONMA

Niigata Seiryō University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2021, Vol. 30 No. 2, 52–55

This study aimed to develop the Japanese version of the parent report of the School Liking and Avoidance Questionnaire (SLAQ) and investigate its reliability and validity. Factor analysis revealed two structures similar to the original scale, with higher internal consistency. Significant relationships were found in the revised edition between enjoyment of school lives and school refusal to a similar degree as in a previous study. In conclusion, the results indicated the validity and reliability of the Japanese version of the parent report of the SLAQ.

**Key words:** school liking, school avoidance, parent, child